| 分　科　会 | 中３年・公民 | 郡市名 | 岡　崎 |
|---|---|---|---|
| 提　案　者 | 岡崎市立美川中学校 | | 田　中　鉄　也 |

**研究主題**　　学ぶ喜びをわかち合い、共生のあり方を問う社会科の授業
－　単元「共生社会に生きる」の実践を通して　－

## １　研究のねらい

昨年度は、本主題の１年次にあたり、１年地理的分野「遠くて近い国、マレーシア」の実践が行われた。昨年度の実践の成果は、以下の通りである。

・問題を身近にし、見学や聞き取り調査を通して足場を確かにしていくことが、学ぶ喜びをわかち合うための土台づくりにつながった。
・現在のわが国（自分）とのかかわりを考えることが、将来的にその国とどのようにつき合っていくかに目を向ける共生意識へとつながった。

その一方で、こうした共生の意識をどのように高めていくかが課題として残った。

そこで、本年度は、３年公民的分野「共生社会に生きる」の実践を通して、主題にせまることにした。その主題のとらえとして、本単元における「学ぶ喜びをわかち合う」とは、確かな足場をもって主張し合うことで、バリアフリー社会の実現に対する考えを相互に練り合い、その実現への思いを共感することにあると考えた。また、「共生のあり方を問う」とは、バリアフリー社会の実現に対する明確な考えをもつとともに、その実現に向けて、どのようにかかわっていくかを自ら判断させることにあると考えた。

本単元の学習を通して、生徒一人ひとりがバリアフリー社会の実現という切実な問題に向き合い、実現への思いを共感しながら、その実現に向けて、積極的にかかわっていこうとする共生意識を高めてほしいと願っている。

## ２　研究の内容と方法

１　<u>単元全体を通して、生徒一人ひとりに学ぶ喜びをわかち合わせるにはどうすべきか。</u>

**①　問題を身近にする**

現状において、障害を抱えることは、生きていくうえで多くの不安を抱えることを意味する。今後、生徒が障害を抱える可能性もあることから、バリアフリー社会の実現は切実な問題となるであろう。

**②　確かな足場を築かせる**

生徒一人ひとりが十分に練り合うためには、他者の考えに安易に妥協したり納得したりすることなく、相互に確かな足場をもって主張し合うことが大切である。そこで、その拠りどころとなる聞き取り調査を重視したい。

**③　学びの共有化を図る**

生徒相互のかかわりや練り合いを重視し、グループでの聞き取り調査や発表会、討論などの具体的な活動を通して学びの共有化を図ることで、バリアフリー社会の実現への思いを共感することができるようにする。

２　<u>単元全体を通して、生徒一人ひとりに共生のあり方を問わせるにはどうすべきか。</u>

**①　障害のある人の思いにふれる**

障害のある人と直接ふれあい、その思いにふれたり、その生きざまから謙虚に学んだりすることができるような場を設定したい。本単元では、自ら障害を抱えながらも、障害のある人の社会的自立の支援に取り組んでいるぴあはうすの鈴木孝光氏をとり上げている。

② **学んだことを実生活に広げる**

本単元の学習を通して芽生えた共生の意識を高めていくためには、学んだことを実践化することが大切である。一つの実践は実感をともないながら、新たな問題意識を生み出すことから、共生のあり方について問い直すことができる。

## 3　研究実践　公民的分野「共生社会に生きる」（13時間完了）

### 1　単元の目標

① バリアフリー社会の実現への思いを共感し、その実現に向けて、積極的にかかわっていこうとする共生意識を高めることができるようにする。

② 相互にかかわり合ったり、練り合ったりすることで、バリアフリー社会の実現に対する自分の考えを深めていくことができるようにする。

③ 多様な学習活動を通して得られた自分の考えを文章にまとめたり、話し合いの場で積極的に発表したりすることができるようにする。

④ 多様な学習活動を通して、バリアフリー社会を実現していくことの必要性とそのむずかしさを理解することができるようにする。

### 2　計　画

| 学　習　課　題 | 学　習　活　動 | 時間 | 学 習 ・ 指 導 上 の 留 意 点 |
|---|---|---|---|
| 障害のある人はどのような思いでいるのだろうか。 | 1．障害のある人の思いについて、自分が障害を抱えた場合を想定して考える。 | 1 | ・本単元で扱う障害を「肢体不自由」に絞り、自分が車いすの生活になったときに感じる不都合や不安、その社会的背景を切実にとらえさせたい。 |
| 実際に車いす体験をしてみよう。 | 2．車いす体験を通して、障害のある人の思いを実感的にとらえる。 | 2 | ・車いすを体験する時間を十分に確保するために車いす10台を用意する。<br>・複数の教師がつき、屋内だけでなく、屋外でも体験できるようにする。 |
| 体験して感じたことについて、みんなで話し合おう。 | 3．体験して感じたことを発表したり、障害のある人に直接聞いて確かめたいことを決めたりする。 | 1 | ・車いす体験で大きくなった不安な思いを発表し合い、共有化を図りたい。<br>・生徒から出た質問事項は、全体の場で検討・整理したものを、ぴあはうすの鈴木氏に事前に知らせる。 |
| ぴあはうすの鈴木さんを通して、障害のある人の思いにふれよう。 | 4．活発な質疑応答を通して、鈴木氏の人そのものやバリアフリー社会の実現への強い思いにふれる。 | 1 | ・鈴木氏の日常生活への質問も織り混ぜながら、活発な質疑応答が行われるような雰囲気づくりに努めたい。また、鈴木氏とのかかわりから、その思いにふれ、謙虚に学ぶ姿勢を育てたい。 |
| 今、バリアフリー社会が進んでいるかをグループで調べよう。 | 5．バリアフリーの現状について調べる視点を練り合い、決定する。 | 1 | ・車いす体験などを通して感じた不安なな思いや前時の鈴木氏とのやりとりから、バリアフリーの現状を見極めることのできる視点を見つけさせたい。 |
| | | | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | 6．グループごとに調査計画を立てる。 | 1 | ・調査方法として、障害のある児童・生徒の就学状況を調べる市教育委員会、雇用状況を調べるハローワーク、設備面でのバリアフリーを調べる市社会福祉課、社会的な支援の状況を調べる市社会福祉協議会、障害のある人の思いを調べる福祉の村、公共交通機関や民間のバリアフリーへの取り組みを調べる名鉄美合駅やイオン、住宅のバリアフリーを調べるハウジングセンターへの聞き取り調査と、バリアフリーへの意識を調べるために保護者へのアンケートを予定している。 |
| | 7．今、バリアフリー社会が進んでいるかを、グループで追究する。 | 1.5 | |
| | 8．グループで追究した結果をまとめる。 | 1.5 | |
| グループで調べた結果を伝え合おう。 | 9．他のグループの調査結果と比較しながら、次時の討論に向けて、自分の考えをまとめる。 | 1 | ・紙上ポスターセッションを行い、学級全員で読み合うようにする。<br>・各グループの追究に対する質疑応答の時間をとることで、学びの共有化を図るようにする。 |
| このままいけば、バリアフリー社会は実現するのだろうか。 | 10. 「実現する」「実現しない」の二つの立場に分かれて討論を行い、バリアフリー社会の実現への自らの思いを強める。 | 1 | ・確かな足場をもって主張することで、相互にかかわり、練り合う場になるようにする。<br>・バリアフリー社会の実現への思いを強めるとともに、そのむずかしさも理解できるようにする。 |
| バリアフリー社会を実現するには、どうすればよいのだろうか。 | 11. バリアフリー社会の実現に向けて、自分はどのようにかかわっていくべきかを考える。 | 1 | ・障害のある人への差別を禁止している「ＡＤＡ（障害をもつアメリカ人法）」を踏まえ、バリアフリー社会の実現に向けて、自分なりのかかわり方を明確にさせたい。 |

**３　研究の実際**

①　第１次「障害のある人はどのような思いでいるのだろうか。」

単元の導入で乙武洋匡著『五体不満足』をとり上げ、乙武氏が産まれたときの母親の思いについて話し合った。「うれしい。」（生徒Ａ）、「産まれてくれてありがとう。」（生徒Ｂ）という前向きな受け止め方の一方で、「産まれてこなければよかった。この先、いろいろ苦労するだろう。」（生徒Ｃ）や「どうやって育てていけばいいの。」（生徒Ｄ）という悲観的なものもあった。後者の生徒には「障害はハンデである」という考え方が根底にあることが伺われた。そこで、もし自分が車いすの生活になった場合に、どのような不都合や不安を感じるかについて話し合った。生徒たちから、日常生活における物理的な不安や周りの目が気になるなどの精神的な不安が数多く出された。事後の感想から、現実問題として、障害を抱えて暮らしていくことに大きな不安を抱いていることがわかる。

・障害があると、とても大変。私がもし車いすに乗ってしか生活できなくなってしまったら、友達に嫌われるとか思ってしまうし、立ち直れないかもしれない。（生徒E）
・今までの自分達は、こんな差別されることなんて気にせずに生きていけばいいと思っていた。けれども、今日の授業で、自分が障害を抱えたときの不都合や不安を出してみて、こんなにあるんだと思った。それに、障害のある人に話を聞けば、もっともっといろいろな思いが出てくるはずだと思った。はっきり言って、自分はこんなにがまんできないと思う。だから、今までの考え方をこれからは変えていきたい。（生徒F）

② 第２次「車いすでの生活はどれぐらい大変なのだろうか。」

前時における生徒Ｅの思いから、車いすで生活することの大変さを実感的にとらえることで、障害のある人の思いにふれることができるようにしたいと考えた。

まず、屋内では、教室から廊下に出る少しの段差がきついことと、いつもは苦もなく移動している渡り廊下も体力を要することがわかった。また、車いすに乗ったままで、学校のトイレを利用するのがむずかしいことや階段が大きなバリアになることもわかった。

屋外では、前日の雨で運動場の土が少し水を含んでいたこともあって、運動場を車いすで移動する生徒はつらそうに見えた。それでなくても、少しの砂利や坂、溝が車いすの移動には大きな負担になることがわかった。また、校外に出た生徒たちは、自分のすぐそばを通り過ぎる自動車に恐怖を感ることになった。

事後の感想から、実際に車いす体験することで、車いすで生活することの不安や恐怖を実感的にとらえていることがわかる。

・階段は絶対に一人では無理だとわかった。一人で乗るときはすごく腕の力がいるものだとわかった。少しの段差でもとても恐ろしいことがわかった。坂は一人では絶対に危ない。平らなところ以外、すべて危ないことがわかった。（生徒G）
・いろいろなところに行ってみて、乗っているとき、段差がかなり怖かったし、乗っていない人も操作が大変だった。屋内よりも屋外の方が危険がいっぱい待ち構えていた。（生徒H）
・車いすを運転するのはとても大変だった。プリントでは、階段は二人で介助していたが、やってみると無理があった。車いすで生活する人の大変さがわかった。（生徒Ｉ）

この車いす体験を通して、それぞれが感じたことについて話し合った。生徒Ｊは「もし車いすを自分が使うことになったら、すごく不安。」と語った。また、「体験してみて、障害のある人は他の人以上にすごい苦労しているし、すごい恐怖と戦っている。」（生徒Ｆ）や「車いすで生活している人は本当にすごい。」（生徒Ｋ）というように、障害のある人への見方が変わってきた生徒も見られた。

そこで、以前に、「障害のある人に話を聞けば、もっともっといろいろな思いが出てくるはず。」という生徒Ｆが抱いていた思いを生かして、実際に障害のある人に話を聞くことで、その思いにせまることにした。自らが障害を抱えながらも、障害のある人の社会的な自立の支援に取り組んでいるぴあはうすの鈴木氏の存在を知らせた。それぞれに直接聞いて確かめたいことをあげさせ、全体で検討・整理したものをもとに、鈴木氏と事前に打ち合わせをした。

③ 第３次「ぴあはうすの鈴木さんはどのような思いをもって暮らしているのだろうか。」

ぴあはうすの鈴木氏との初めての出会いであったが、生徒たちは活発に質問をしていった。質問７に対する鈴木氏の回答に、その場の空気もなごんでいった。

以降、鈴木氏の人そのものにせまるような質問が続いた。質問11については、前時において「この質問は失礼ではないか。」（生徒Ｋ）という意見が出たものであったが、鈴木氏の「相手に遠慮することが、逆に差別をしている。」という考えに後押しされ、生徒Ａは質問することになった。授業の終わりに、鈴木氏から生徒Ｌに声をかけ、生徒Ｌの「障害の

Ｑ１．今まで一番困ったことはありますか。
Ａ１．バスや電車などを使って遠くに出かけられないこと。
Ｑ２．トイレはどうしていますか。
Ａ２．何とか自分でやっている。
（中略）
Ｑ７．部屋にいるときは何をしているのですか。
Ａ７．この歳になって照れくさいんだけど、プレステ２をやっている。「バイオハザード」にはまっていた。
（中略）
Ｑ11．お金があれば、足を治したいですか。
Ａ11．足を治さずに、障害のある人たちがいっしょに暮らすことのできるアパートをつくりたい。
Ｑ12．岡崎市に何かしてほしいことはありますか。
Ａ12．階段などをなるべくスロープにするなど、バリアフリーを進めてほしい。

ない人に望むことは何ですか」という質問をとり上げた。そして、鈴木氏は「この質問を見たとき、私ははっとしてしまった。こんなすごいことに目を向けることのできる生徒さんがいることを知って驚いた。みんなには、バリアフリーの現状を調べてほしい。」という思いを語った。

全部で20余の質疑応答が行われ、予定した時間が終了した。事後の感想のなかで、生徒たちは鈴木氏との出会いを次のようにまとめている。

・わりと普通の人だとわかった。近所のおじさんみたいな感じを受けた。ゲームとかについても話してみたいと思った。（生徒Ｄ）
・初めは私たちとは違うというイメージをもっていたけど、今日の話を聞いて、何も私たちとは変わらないんだなと思った。（生徒Ｍ）
・障害のある人たちのために、バリアフリーについて考えられているお店を調べてまとめ、障害のある人たちに教えてあげたい。（生徒Ｎ）

生徒たちは鈴木氏と接することで、障害のある人に対して「同じ人間である」という意識をもつとともに、「バリアフリー」について意識し始めるようになった。

④　第４次「今、バリアフリー社会は進んでいるのだろうか。」

前時の鈴木氏の「バリアフリーの現状を調べてほしい。」ということばを受けて、生徒の意識も「バリアフリー」に向いており、具体的に調べていくことで、バリアフリーの現状を判断することのできるものを検討した結果、次の視点について調べていくことにした。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 障害のある児童・生徒の就学状況 | 6 | 障害のある人を支援する人々 |
| 2 | 店のバリアフリーの状況 | 7 | 健常者のバリアフリーへの意識 |
| 3 | 住宅のバリアフリーの状況 | 8 | 障害のある人の思い |
| 4 | 交通機関のバリアフリーの状況 | 9 | 設備のバリアフリーの進行状況 |
| 5 | 障害のある人の雇用状況 | | |

グループをつくり、前時に決まったテーマのなかから、自分たちが調べたいものを選ぶようにした。調査場所については、基本的には生徒の側から追究のねらいに添った調査先を見つけることができるようにしたいと考えた。テーマ１～５については生徒の側から出てきたものになり、テーマ６～９については教師が助言を与えることで決まった。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 市教育委員会 | 4 | 名鉄美合駅・タクシー | 7 | 保護者へのアンケート |
| 2 | イオン | 5 | ハローワーク | 8 | 福祉の家 |
| 3 | ハウジングセンター | 6 | 市社会福祉協議会 | 9 | 市社会福祉課 |

質問事項については、各グループで検討したものを事前にチェックすることで、追究のねらいとずれているものについては修正を加えた。なお、質問事項を事前に調査先に知らせ、生徒の追究活動が深まるように配慮した。

実際に調査先に足を運び、バリアフリーの現状を肌で感じることは、生徒一人ひとりが確かな足場をつくっていくうえで有効であった。その顕著な例として、名鉄美合駅に聞き取り調査に出かけた生徒Ｊが、駅長からひと通りの説明を受けた後で、「もし駅長さんが

障害を抱えたとき、この駅を利用することに不安を感じませんか。」という質問をした。引率した教師の話では、駅長は「不安である。」と答えたそうである。自分の足場を確かなものにするために、駅長の説明に安易に納得することなく、自分がすっきりしないことを明らかにしたいという粘り強い追究の姿勢であった。

「今、バリアフリー社会は進んでいるのだろうか。」という課題に対する調査活動を終えて、それぞれのグループがその結果を報告用紙にまとめた。

【調査を終えて】
○福祉の村：福祉の村では、障害があるからといって、特別扱いしないで、障害のない人と同じように扱っているから、障害のある人も楽しく通うことができている。
○アンケート：みんなバリアフリーが進んでいるとはあまり思っていないようであった。
○ハローワーク：バリアフリーはある程度まで進んでいる。
○イオン：バリアフリーはめざましく進んでいる。
○名鉄美合駅：駅の人たちも、障害のある人のために、いろいろなことを考えて仕事をしている。だから、障害のある人も徐々に普通の人たちと同じ生活ができている。
○市教育委員会：美川中学は障害のある子のための施設は何も整っていない。
○市社会福祉課：バリアフリーは市がお金を出せばできるというものではない。私たちが協力し合ってこそできるのです。心のバリアフリーをもっと大切に考えていくことが必要です。
○市社会福祉協議会：昔と今では、バリアフリーへの見方が大きく変わってきている。
○ハウジングセンター：こうしてバリアフリー対策の家が増えれば、障害のある人たちが特別扱いされることもなくなるのではないか。

市社会福祉課に聞き取り調査に出かけた生徒Oは、その日の生活ノートのなかで「とてもていねいに説明してくれたので勉強になりました。今度の夏休みに、説明のなかに出てきた『虹の家』に生徒Bと出かけてみたいと思います。」と書いた。同じく生徒Gは「市社会福祉課へ行って、障害のある人の気持ちと同時に、今の岡崎市の福祉などの様子がよくわかりました。それまで以上に、福祉に対する思いを増すことができました。」と書いてきた。今回の聞き取り調査が、生徒とはかけ離れたものではなく、生徒の納得を引き出すものになっていることがわかる。

そこで、それぞれのグループが追究した結果を共有化するために、紙上ポスターセッションを開いた。

全体での質疑応答を終えて、教室全体の雰囲気は「以前と比べて、バリアフリー社会は進んでいる。」（生徒K）という考えに落ち着いた。「それでは、将来、自分が障害を抱えることになっても安心して暮らすことができるか。」という教師の問いかけに対して、ほぼ半分の生徒が「安心できない。」と意思表示した。

そこで、「このままいけば、バリアフリー社会は実現するのだろうか。」というテーマで討論を行うことを伝え、それに対する自分の考えをまとめさせた。

⑤　第５次「このままいけば、バリアフリー社会は実現するのだろうか。」

ぴあはうすの鈴木氏を迎えて、討論が始まった。当日の欠席生徒５名を除く34名の内訳は、「実現する」「実現しない」ともに17名であった。

この討論は、起点となる発言によって、四つの段階を踏んでいった。

**ア　最初の論点に導いた生徒Ｋの発言**

討論の立ち上がりは、「実現しない」側の意見が続いた。最初の論点を見出すために、「実現する」側からも意見が出るように、考えをまとめる時間をとった。

再開後、挙手をした生徒Ｆを指名した。「実現する。ハウジングセンターの人に聞いたら、老後のことまで考えて家を建てる人が多い。」

教師：このままいけば、バリアフリー社会は実現するのだろうか。
生徒O：実現しない。設備は進んでいるけど心のバリアフリーは進んでいない。
生徒M：バリアの数は減ると思うけど、完全になくならない。みんなが協力しないと実現しない。
生徒C：アンケート結果から「進んでいない」と答える人が多い。みんなの気持ちが変わらないと実現しない。

という意見に続いて、「実現する」という立場の意見が３人続いた。この流れを切るかのように、生徒Ｋが生徒Ｆに放った発言によって、一つの論点が生まれた。

討論の論点が「家のバリアフリー」に終始しそうな雰囲気を感じたので、切り口を変えるために、「実現してほしい」という思いをもちながらも、「実現しない」という立場をとっていた生徒Ｂを指名した。

生徒Ｆ：家はバリアフリーが基本になつているから、実現すると思う。
生徒Ｋ：新しい建物はバリアフリーだけど、そうなっていない古い建物が多い。何しろお金もかかるし、時間もかかるので実現しない。
生徒Ｄ：設備を整えるだけではだめだと思う。
生徒Ａ：階段があるのはバリアフリーではない。
生徒Ｆ：階段もバリアフリーが工夫されている。
生徒Ｋ：やっぱり全部よくなければ、バリアフリーではない。

**イ　「心のバリアフリー」に目を向けさせた生徒Ｂの発言**

生徒Ｂの発言をきっかけに、「心のバリアフリーは実現しない」とする発言が続いた。「実現しない」と考える生徒たちは自らの主張の足場にして、猛烈な攻勢をかけていた。「みんながその気になれば、必ず実現する。」（生徒Ｉ）や「思いやりをもった人が増えればいい。」（生徒Ｑ）などの意見をひき出すことができず、苦しい状況のなか、生徒Ｃや生徒Ｏがあくまで反論の姿勢を見せていた。

生徒Ｂ：障害のある人に声をかけたり、手を差しのべたりすることはとても勇気がいる。それに、自分が障害を抱えたら、周りの目を気にしてしまうので、心のバリアフリーが進まなければ実現しないと思う
教師：生徒Ｂさんは本心はどう思っているの。
生徒Ｂ：実現してほしいと思う。
教師：心のバリアフリーは実現しないのかなあ。
生徒Ｋ：心のバリアフリーは心に余裕がないとだめ。今は不景気だから。
生徒Ｐ：今の日本をきれいさっぱり変えないとだめだと思う。
生徒Ｃ：景気がよくなれば変わるというものではない。心のバリアフリーとは別である。
生徒Ｏ：景気は私たちには無関係である。

**ウ　「心のバリアフリー」の一つの考え方を示した生徒Ｊの発言**

生徒Ａが何か言いたそうに挙手をしたので、指名した。生徒Ａは全体を見渡しながら、「『心のバリアフリー』と言うけれど、障害のある人と結婚したいと思う人がどれだけいるのですか。」と、みんなに聞いた。まさしく生徒Ａの本音をぶつけた意見であった。安易に「心のバリアフリー」を口にすることに対して生徒Ａが発した警告のように思われた。その場で確かめることはできなかったが、あのとき、多くの生徒が心のなかで葛藤を感じていたのではないかと考えられる。その後、何人かの意見が続いたところで、自分の考えをしっかりもちながらも、討論の一部始終にじっと耳を傾けていた生徒Ｊを指名した。生徒Ｊは「私たちが調べ学習をすることで、障害のある人たちへの目が変わったと思う。たとえ、今、進んでいなくても、私たちが障害をもったらバリアフリーが進んでいてほしいと思う。」と切々と語った。障害のある人への見方が変わることも「心のバリアフリー」の一つの考え方であるということを示した意見であった。

**エ　自分の本音をぶつけた生徒Ａの発言**

それまで、討論の様子を興味深く観察していた鈴木氏を交え、「共に生きる」ことについて話し合った。生徒Ｅは「障害のある人もない人も普通に接すればいい。もし、段差があって困っているときは、手助けをすればいいと思う。」と発言した。これに対し、鈴木氏は「対等な関係をつくる方法、それがバリアフリーである。『手伝って。』と言われたときに、『はい。』と言って手伝えることが、心のバリアフリーである。」とつけ加えた。また、生徒に対して、「バリアフリー社会が実現してほしいと思っている子は手を挙げてみてください。」と問いかけた。１人だけ手を挙げていない生徒Ａがいた。理由を聞くと、「失礼かも知れないけれど、鈴木さんは足が不自由だから、普通ではないと思う。」と答えた。鈴木氏が「手助けすることはできないの。」と問いかけると、生徒Ａは「前に、障害のある人がいたので手助けしようと近づいたら、すごく嫌な顔をされたことがある。だから、それ以来、手助けはしていない。」という自身の経験を語った。生徒Ａのことばに対して、「生徒Ａさんは、そのとき、その人に声をかけましたか。障害のある人は警戒心が強いので、

突然声をかけられると、どうしてもそのような態度になってしまう。」と、鈴木氏は誤解があったことを示唆した。最後に、鈴木氏から「やっぱりバリアフリー社会は実現してほしくないの。」と問われ、「実現してほしい。」と答えた。

討論を終えた後の生徒の感想をいくつか紹介したい。

- ちがう意見なのに、全部納得できる素晴らしい意見だったので、自分の意見を発表するタイミングがなかなかつかめなかった。（生徒N）
- 前の時間のときよりも、鈴木さんの考えていることがすごくわかった。みんな、いろいろ言っていたけど絶対何かを感じたと思う。こういう人のことを思う気持ちが高まっていけば、バリアフリー社会は実現すると思う。（生徒J）
- みんな、やっぱりバリアフリー社会になってほしいんだということがわかった。このような学習を通してそういう人が増え、実現できるといいと思う。（生徒M）

⑥　第６次「バリアフリー社会を実現するには、どうすればよいのだろうか。」

本単元の学習のまとめとして、障害のある人への差別を禁止した「ＡＤＡ（障害をもつアメリカ人法）」を例示し、バリアフリー社会の実現に向けて、自分はどのようにかかわっていくべきかについて考えることにした。

「ＡＤＡ」に対して、「すごい法律だと思う。でも、これはアメリカだからできることなのかもしれない。」（生徒Ｉ）や「裁判に訴えるとかいう罰がないと障害のある人を平等だと思えないのかと疑問に思う。」（生徒Ｊ）など、生徒の受け止め方は多様であった。

最後に、バリアフリー社会の実現に向けて、どのように自分はかかわっていくのかという課題に対して、生徒Ｌは次のような考えをまとめている。

一人ひとりがバリアフリーに関心の目を向けていくことが大切である。それに、一番大事なことは、みんなの気持ちだけど、そこまでいく過程として、物理的な面なども大切になってくると思う。

ゆとりの教育で、今の子どもたちに学んでほしいことは、こんなことだと思う。総合的な学習の時間が始まり、これからの子どもたちが、バリアフリー社会の実現に貢献していくかもしれない。

## 4　研究の成果

今回の実践を通して、「バリアフリー社会の実現」が「とても関心のあることの１つ」（生徒Ｓ）になっていった。自分が障害を抱えたときの不安を実感的にとらえたこと。ぴあはうすの鈴木氏の思いにふれたこと。調査活動を通して、バリアフリー社会の実現に取り組む人々の生身の声や熱意にふれたこと。討論において、確かな足場をもって主張し合い、自分の本音をぶつけたこと。これらの一つ一つが、生徒一人ひとりの追究を深めたのではないかと考える。

研究の成果を、以下にまとめたい。

１　ぴあはうすの鈴木氏とのふれあいを通して、障害のある人の思いにふれることができ、障害のある人への正しい理解につながった。第12時における生徒Ｊの「この学習を通して、障害のある人への目が変わった。」と同じ思いをもつ生徒が増えていった。本単元の学習を終えて、生徒Ｄは「授業が始まった頃より興味がわいた。鈴木さんの話を聞いて、『本気でヘルパーになりたい』と思ったこともあった。母に話したら『大変だよ』と言われ、断念した。中途半端な気持ちではいけない。」という感想を書き残している。このような問題に目を向けたり、自らかかわっていこうとしたりするところに、共生意識の確かな根づきを感じる。

２　ぴあはうすの鈴木氏の話に安易に納得せず、自分の本音をぶつけた生徒Ａ。「生徒Ａさんと鈴木さんとのやりとりを聞いていて、涙が出できた。」（生徒Ｒ）や「生徒Ａさんの発言にはかなり冷や冷やしたけど、すごいと思った。」（生徒Ｃ）の感想に見られるように、確かな足場をもった、自分の本音をぶつけた発言は、生徒Ａへの批判よりも多くの共感を集めることになった。その生徒Ａについても、討論を通して、「バリアフリー社会の実現は無理だと思うけど、努力することはできると思う。」という思いをもった。このことから、「バリアフリー社会が実現してほしい。」という思いを全員がわかち合うことができたと感じている。